

Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands

# 島嶼研だより

No.64

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

2012年10月

---

 主な記事

ミクロネシアの小島における社会関係資本連携型のデング熱対策実践	p1
学生奮闘記「土器のムシ!？」(真邊 彩)	p3
島嶼研シンポジウム「島教育—島で学ぶ・島から学ぶ—」	p4
フィールドこぼれ話「博物館もフィールド」(仲谷英夫)	p13
連載 とうがらしに旅して 「媚薬かはたまた毒薬か」(山本宗立)	p14

---

## ミクロネシアの小島における社会関係資本連携型の デング熱対策実践

国際島嶼教育研究センター長 野田伸一

デング熱・デング出血熱はデングウイルスの感染による急性熱性疾患で、アジアや太平洋諸島など熱帯亜熱帯に広く分布します。近年患者の増加、流行地域の拡大、重症型デング出血熱の出現などにより、公衆衛生上の大きな問題となっています。デングウイルスの主要媒介蚊はヤブカ属のネッタイシマカとヒトスジシマカですが、太平洋地域では固有のヤブカ属の蚊によっても媒介されます。ミクロネシア地域においてもしばしばデング熱の流行がみられます。

国際島嶼教育研究センターでは 2010 年から「ミクロネシア連邦でのデング熱媒介蚊の分布調査と予防対策のための地域社会調査」(科学研究費基盤 C、平成 22~24 年度、代表者：野田伸一)をおこなってきました。2010 年はミクロネシア連邦ポンペイ州の 3 島(ポンペイ島・モキール環礁・ピングラップ環礁)、2011 年はチューク州の 3 島(ウェノ島・ピス島・ロマヌム島)において、蚊の分布調査および地域社会調査を実施しました。その結果、ポンペイ

州とチューク州にデング熱の主要媒介蚊であるネッタイシマカ、ヒトスジシマカおよび *Aedes hensilli* の分布が確認されました。患者の移動によってデング熱の流行が起きる可能性を大きく秘めている状況にあります。注目すべき点は、伝統的な自給自足の食事から輸入食品に依存する食生活に変わったことによって発生する多量の塵(空缶やプラスチック容器)が主要な蚊の発生源となっていたことです。

医療設備が不十分な地域では、媒介蚊発生予防が重要なデング熱対策となります。他の地域からの蚊の飛来がない小さな島では、ヤブカ属幼虫の生息場所となる住居周辺の小容器を除去することによって、デング熱のリスクを大きく低下させることができると考えられます。持続性がある蚊対策とするためには、地域の社会・経済状況を考慮し、住民参加による対策の実践が必要となります。

そこで、これまでの研究を発展させて、兼務教員とともに今年度より「ミクロネシアの小島

における社会関係資本連携型の Dengue 熱対策実践」(科学研究費基盤 B、平成 24～26 年度、代表者：長嶋俊介)を開始いたしました。

本科研費プロジェクトでは、地域の経済・社会、地域の植生調査、伝統的な食物の生産、住民の食生活と健康状況、食生活に伴って生ずる塵の状況の把握をおこないます。これらの結果

をもとに、最終目的である住民参加による蚊の発生源を減らす活動を実施し、Dengue 熱発生のリスク低減を図ります。このプロジェクトは、近代化によって弱体化しつつある伝統的社会の価値の再認識や健康的な食生活への回帰を実現することにもつながると考えています。

**WHAT IS DENGUE ?**

Dengue is a viral disease transmitted to humans by the bite of an infected *Aedes* mosquito. Outbreaks of dengue fever in Yap State, Palau and the Marshall Islands were reported in 2011.

**THE SYMPTOMS**

The symptoms of dengue can range from no symptoms at all, to a mild fever, to a serious illness with bleeding that can cause death.

Other symptoms may include:

- Sudden high fever (which may disappear after 3-4 days, only to reappear later)
- Pains in muscles and joints
- Severe headache and backache
- Pain on moving the eyes
- A rash, with or without itching
- Loss of appetite and weakness, with an unusual taste in the mouth
- Swollen lymph glands

Recovery is usually complete, but weakness and depression may linger for several weeks.

In addition to the above symptoms a more severe form of the disease, which is called dengue hemorrhagic fever, may also show one or more of the following:

- Skin bleeding (hemorrhage)
- Nose and gum bleeding, blood vomiting, blood in stool, severe menstrual bleeding
- Some patients go into a state of shock (rapid and very weak pulse, with cold skin and restlessness)
- Loss of blood and body fluids, loss of consciousness

Patients in shock are in danger of dying if the right treatment is not immediately given. A patient in shock may die within 12-24 hours, or recover rapidly if the right anti-shock treatment is provided.

Consult your physician if you develop these symptoms.

**THE VECTORS OF DENGUE**

The disease is transmitted by female *Aedes* mosquitos. In FSM, *Aedes aegypti*, *Aedes albopictus* and *Aedes hesili* are important vector species.



*Aedes aegypti*\*



*Aedes albopictus*\*



*Aedes hesili*

\*Photographs sourced from National Institute of Infectious Disease website.

**PREVENTIVE MEASURES**

Generally, the adults will be found around 50 meters from the breeding sources with a maximum flight distance of around 200 meters. The elimination of mosquito breeding sites from houses and living-places is effective to reduce the numbers of vector mosquitoes.

**Breeding habitats**

- Empty tins
- Buckets, bottles, pots, pans
- Coconut shells
- Storage drums
- Boats, canoes, etc.



Potential breeding habitats of *Aedes* in an outdoor situation



Cleaning the environment and removing breeding sites



Tins and bottles in plastic bags for disposal

Burying of discarded tins and other rubbish

Illustrations sourced from "Guidelines for Dengue Surveillance and Mosquito Control", WHO 1995

**Prevention of Dengue Fever Outbreaks**



Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University

1-21-24 Korimoto, Kagoshima, 890-0580, JAPAN  
Tel: +81-99-285-7304 Fax: +81-99-285-6197  
E-mail address: shimizu@rcpi.kagoshima-u.ac.jp

## 学生奮闘記

### 土器のムシ!?

—小さな穴から探る縄文人の生活—

真邊 彩 (鹿児島大学大学院人文社会科学研究所)

考古学といえば、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか？発掘や土器、博物館など、答えは様々でしょう。今回ご紹介するのは、「圧痕レプリカ法」というものです。圧痕レプリカ法とは、土器の表面あるいは断面に穴や凹みとして残る痕跡（圧痕）をシリコンゴムで型取りし、電子顕微鏡で観察する方法です。圧痕の由来には、土器製作の際に付いた、あるいは粘土に入った植物種子や昆虫、製作時の敷物、指紋などがあります。これらは当時の土器づくりの技術や環境、利用植物や家屋害虫といった、当時の生活の一端を復元するための有効な方法として注目されています。

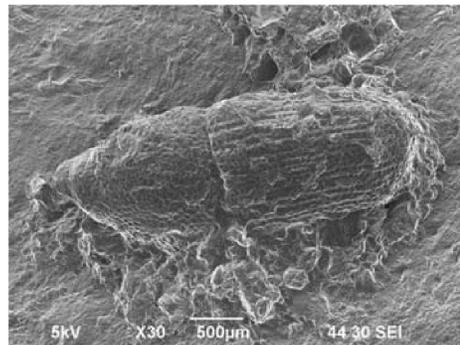
私は2010年度から2年間、熊本大学文学部の文部科研技術支援者として、九州を中心に中四国・関東・東北・韓国での圧痕調査に従事しました。顕微鏡を使うという一見理系のようなイメージとは反対に、収蔵庫で土器を1点1点手に取り、黙々と観察していきます。ときには、一人で1万点近い土器を見ることもあります。数ミリの圧痕を探し出す作業は、「本の虫」ならぬ土器にかじりつく「土器のムシ」です。今では、土器をみれば圧痕を探す習性がすっかり身についています。

このような努力の甲斐あって、鹿児島県種子島から大きな発見がありました。西之表市に所在する三本松遺跡から出土した縄文時代早期（約一万年前）の土器から、合計7点のコクゾウムシ属の圧痕が見つかり、これまでエジプトや中国で見つかった例よりも数千年古く、世界で最も古いコクゾウムシ属の痕跡として話題になりました。コクゾウムシ属はヒトが食物を貯蔵するとそこに加害する害虫として今も知られています。ヒトと害虫との付き合いは1万年前からすでに始まっていたのには驚かされました。今、私たちはこのムシ達が一体何に加害していたのか、縄文人の食生活を探る研究を続けています。

この圧痕調査は、収蔵庫で眠っている資料から新たな情報を引き出す、いわば“第二の発掘”ともいえる研究方法です。縄文時代ではこれまで一般的に知られていたドングリ以外にもマメ類やベリー類、シソの仲間などを利用していたことがわかっています。鹿児島は酸性土壌のため炭化物として種子が残りにくい中、この圧痕調査が大いに役立っています。鹿児島に昔住んでいた縄文人はどのような環境に住み、何を食べ、どのような植物を利用していたのか・・・圧痕調査でみえる世界は、これからますます広がるでしょう。



収蔵庫での作業風景



コクゾウムシ属圧痕の電顕画像（三本松遺跡）

画像提供：熊本大学小畑研究室

## 島嶼研シンポジウム「島教育－島で学ぶ・島から学ぶ－」

平成 24 年 7 月 21 日（土）に鹿児島大学国際島嶼教育研究センター主催により島嶼研シンポジウム『島教育－島で学ぶ・島から学ぶ－』が開催されました。当日は多数の方に御参加いただき、盛会となりました。



会場の風景

### 1) 離島における大学教育

八田明夫

(鹿児島大学教育学部)

本報告では、奄美群島内（奄美市及び大島郡）に大学を設置する必要性と設置する方法論を述べる。筆者は、誘致すべき大学の組織の形態を学科制と課程制に区別して考える。課程制の大学は講座や大講座に所属する教員が幾つかの課程をお互いに支えあっている。

教育学部などは課程制をとっている。5、6名の大島キャンパスの課程の担当教員と鹿児島キャンパスの教員が講義を開講する。鹿児島キャンパスの教員は集中講義を行う。学部の定員削減を検討している教育学部の学生定員を活用すれば、授業料収入、入学金収入などの収入が確保できる。

課程制をとっている教育学部こそ、奄美大島に課程の一部を設立するという方法で設置が可能ではないだろうか。報告では、単位修得の工夫、教員免許取得の条件、社会教育施設とし

ての役割、鹿児島大学の研究の拠点形成、などについて述べる。

### 2) 奄美をフィールドとした鹿児島大学の学部教育と大学院教育

野呂忠秀

(鹿児島大学水産学部)

鹿児島大学教育センターでは、島嶼に関わりのある教員たちが奄美などで体験型実習教育を行ってきた。これらの授業は、学部や学年を超えた学生が南西諸島の島々でエコツアーを体験するものであった。その後、平成 17 年に根建心具教育センター長が中心となって申請し採択された文科省教育 GP プログラム「鹿児島から世界を見る」の中で、これらのフィールド実習が、共通教育カリキュラムの中で体系的に開講されるようになった。ローカルな視点をグローバルな学問に昇華させることを目的とするこの教育では、奄美や熊毛の島々をもフィールドとして活用しようとするものであった。

この取り組みは、今なお共通教育において継続されているが、さらに大学院でも研究科横断型の教育コースとして展開されようとしている。



八田先生、野呂先生、野田先生（左から）

### 3) 奄美サテライトの試み (修士・博士：奄美大島・徳之島)

桑原季雄

(鹿児島大学法文学部)

奄美サテライト教室は、奄美に住みながら鹿児島大学大学院の正規の授業が受講できる教室というのがうたい文句になっている。従来、サテライト教室とは、地方大学が社会人の利便性を考えて都市部に設置することが多かった。奄美サテライト教室は、逆に、地方の大学が高等教育の機会の少ない離島の社会人にその機会を提供するというものである。そもそも奄美サテライト教室は、2003年4月の串木野サテライト教室の開講に始まり、同年7月に法文学部が当時の名瀬市長からサテライト教室開講の要請を受けて検討の結果、10月に開講を承認したことに始まる。その後、11月にサテライト教室の現地説明会および名瀬市との覚書の調印が交わされ、2004年4月に奄美市の中央公民館の教室を借りて開講した。第1期生は5名の科目等履修生と奄美在住の1名の大学院生の6名であった。2006年3月には奄美市と鹿児島大学との間で包括連携協定が締結され、一研究科の取り組みから鹿児島大学全体としての取り組みに発展した。また、徳之島教室は、2006年10月に徳之島町でサテライト教室の開講準備として公開講座を実施し、現地説明会を開催した後、2007年4月に7名の科目等履修生を得て開講した。現在までの8年間に、修士課程修了者が5名となり、2009年4月に奄美サテライト出身者が初めて博士後期課程に進学し、3年後の2011年3月に博士号取得第1号となった。2012年4月には2人目の博士後期課程進学者が出ている。本発表では、鹿児島大学のこれまでの奄美サテライト教室の取り組みや課題、奄美大島と徳之島あるいは奄美にとってのサテライト教室の意義などについて考察を交えて報告する。

### 4) 島で開講している科目：島のしくみ・島嶼学概論

野田伸一

(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

国際島嶼教育研究センターでは共通教育科目“島のしくみ(集中講義)”を与論島で開講している。大学院を横断して体系的に履修するプログラム「島嶼学教育コース」のコア科目である島嶼学概論ⅠとⅡの一部を硫黄島と中之島で開講している。鹿児島島の特徴として鹿児島市とそれ以外の自治体の規模の違い、それと離島の存在があげられる。離島では環海性、隔絶性、狭小性などの制約の中で、優れた自然環境の中で貴重な歴史文化を育てており、地域の多様性が保全されている。また、離島の地域社会では伝統的な共同体が地域活性化の原動力となり、自らの英知と努力により多種多様な地域おこしの取り組みが行われている。これらの授業では経験豊かな実務者による講義が中心となっており、離島の現況や取り組みについて理解するとともに地域社会の在り方や活性化について考える機会を提供している。

### 5) 臨床教育の現場で学んでほしいこと

瀬戸上健二郎

(薩摩川内市下甕手打診療所)

最近、「離島医療と医学教育」という言葉があまり違和感なく受け止められるようになってきたが、その背景には、若い世代に「地域医療」、つまり「総合診療」や「プライマリケア」に対する関心の高まりがあるといっていだろう。鹿児島大学の中にも離島医療講座が開設されると、離島医療が積極的に医学教育に取り入れられ、今ではすべての医学生たちが何らかの形で離島医療実習に参加している。

一方、平成16年度から始まった卒後臨床研修制度では離島の小さな診療所も地域医療研修の協力施設として組み込まれており、離島医



瀬戸上先生、ヘンリー先生、桑原先生 (左から)

療研修を希望する研修医は多い。これも若者たちの間に「地域医療」に対する興味が広がっている証拠だろう。もともと医学部に進んだほとんどの若者たちの心には、いつか離島や僻地に飛び込んでみたいという思いがあると思っているが、要はそのような若者たちをどう育てるかで、少なくとも旧来の大学病院や都市部の大病院での研修では専門医は育てられても地域に必要な総合医的医師の養成は難しい。それを補うのが離島僻地医療で、地域住民の目線で地域医療を体験しながら地域を学び、地域住民に学ぶという姿勢が重要だと思っている。もちろん離島医療は最先端の医療とは程遠い世界だが、しかし、いつ何が飛び込んでくるかわからない離島医療は将に本物の総合診療と言っても過言ではなく、都会の大病院にないものを提供することで相互補完的役割分担が出来るものと思っている。

「離島医療を体験して初めて医学部に入ったよるこびを実感できた」と言いながらそれまでの学生生活を一変させ、目を輝かせていた学生がいた。離島医療と医学教育と言っても何も教えるものなどない。ただ生の離島医療を見てもらい、何かを感じてもらえばいい。そして若者の心を動かすことが出来ればと願っている。

#### 6) 鹿児島県硫黄島への現地調査旅行に関するコメントとニュージーランドとの比較

ヘンリー・ジョンソン

(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

これは 2012 年 7 月に訪れた鹿児島県硫黄島への短期調査旅行に関するコメントである(ニュージーランドとの若干の比較も含まれる)。この硫黄島への旅は鹿児島大学国際島嶼教育研究センターによる大学院生への教育プログラムの一環として計画された。現地調査を行うことは今や、多くの研究分野において基本的要素であり、教育的視点からのそのような学習には、様々な仮説や意味がある。現地調査には、その最も広い意味における基礎的方法論ばかりでなく、状況的学習や体験的学習という実践が含まれる。状況的学習ではその調査研究がなされる場における学習の実践が強調される。また、体験的学習では、学習経験からの意味の生成が重視される。これらの教育理論はいずれも現地調査にとって重要である。とりわけ、島で学ぶことや島から学ぶことを目的とする教育的設定のもとで、小島嶼という文脈においてはなおさらである。私の発表の目的は、これらの学習の二つの領域に焦点を当てることによって、今回の現地調査旅行に関する私自身の学習経験についてじっくりと考えてみることにあつた。さらに、私のコメントは、私自身の目的や経験、観察を批判的に探究する再帰的アプローチに基づいている。



討論の風景

---

 国際島嶼教育研究センター研究会発表要旨
 

---

第 126 回 2012 年 4 月 16 日  
船と海の思い出

市川敏弘  
(鹿児島大学理工学研究科 (理学系))

海の研究を専門にしたために練習船や調査船で、北太平洋、ベーリング海、南太平洋、インド洋などへ出かける機会があった。合計すると約 1500 日間を船で暮らしたことになるが、乗船回数が最も多い船は鹿児島大学の敬天丸であった。特に長期航海の海上での作業や寄港地での体験は、あの惨憺たる船酔いの経験も含めて、忘れ難いものがある。今までつき合った船や海の姿は、私にとっては限りなく懐かしい思い出として残っている。広くて深い海は、陸上とは違って行こうと思えば行けるという場所ではない。そのため研究の能率は悪いが、そこにまた海の魅力がある。船と海の体験について、研究成果も少し含めて報告したい。

第 127 回 2012 年 5 月 7 日  
「甌島のトシドン」とユネスコ

マイケル・フォスター  
(インディアナ大学)

2009 年に日本の伝統 13 件がユネスコの「人類の無形文化遺産の代表一覧」に記載された。そのうちの一つが鹿児島県下甌島で大晦日に行われる「甌島のトシドン」である。「トシドン」とは子どもの教育や嫉のために代々伝えられる大事な年中行事である。本発表では、トシドンのあり方や本来の意味合いを紹介した上、ユネスコに認められたことにより、これからトシドンがどのように変化して行くのかを考える。観光客が増えるという予測もあり、伝統を観光の目玉として島の活性化を図る、好ましい方法とはどのような形をとるのだろうか。

下甌島の地元の人々の声を取り上げ、考察してみたい。

第 128 回 2012 年 5 月 15 日  
福岡モスク—在日ムスリムコミュニティの新展開に関する一事例

リワント・ティルトスダルモ  
(インドネシア科学院社会文化研究センター)

発表者は現在、在日の移民コミュニティ、とりわけインドネシア人ムスリムにみられる宗教生活の研究に着手し、調査を進めているところである。2003 年から 4 年には、茨城県大洗において主に (スラウェシ島北部の) ミナハサン語系のキリスト教徒からなるインドネシア人移民コミュニティ (メンバーの大多数が不法長期滞在者である) について研究を行った。2004 年から 5 年には、新安城モスク (愛知県安城市) 近辺のインドネシア人移民コミュニティ (大多数が研修生) を観察調査した。昨年、福岡市の箱崎に新たに建立されたモスク近辺のムスリムコミュニティの調査を開始したところである。福岡モスクのムスリムは、エジプト人、バングラデシュ人、インドネシア人が大勢を占めるものの、その他さまざまな国籍から構成されている。そのうち、インドネシア人の大多数は福岡市とその近郊在住の学生と研修生である。発表者の関心の一つは、異質な宗教的、文化的環境のなかでモスクを建設しようとした彼らの取り組みと機動性にある。ムスリムコミュニティの観察調査と調査協力者との対話を通じて、外国人、とりわけイスラムに対する興味深い寛容性と順応性を見せる日本人とムスリム相互のやりとりに関する理解を試みた。現在、欧米において強まるイスラム嫌悪感を目の当たりにするなかで、こうした反応は驚きに値する。この 20 年ほどの日本におけるムスリム数

の増加とモスクの建設ラッシュはひとつの興味深い現象であり、発表者自身が福岡で観察したこともその流れに位置づけられるべきものである。日本では現在、より多様で多元的な社会が、ゆっくりと、しかし確実に進展しつつあるといえるだろう。

第 129 回 2012 年 6 月 25 日

島は孤ならず必ず隣あり？

奄美沖縄環境史研究の夢

安溪遊地

(山口県立大学国際文化学部)

島は、さまざまなものに分断され続けてきた。それらをつなぐ失われた輪を見つけない。それが、1974年に始まった西表島通いにつづく、私の島巡りの旅の課題となった。とくに2005年から5年間は、地球研(総合地球環境学研究所)の湯本貴和教授のもとで集中してとりくんだ日本列島の環境史研究プロジェクトで、私たちは、奄美沖縄の島々を精力的に廻った。その結果は、6冊の論文集のうちの1冊『島と海と森の環境史』(文一総合出版)、7冊の『聞き書き・島の生活誌』(ポードーインク)、1冊の『奄美・沖縄環境史資料集成』(南方新社)という、合計で2000頁近い成果物となった。これらの本は、30年以上を種子島から与那国島までの島々の研究についてやしてきたメンバーを中心に、地域を知り・地域を愛し・地域を守るという研究者と地域住民の協働の産物だとも言える。

今回は、これらの研究成果の中から、大正時代まで島々を結んでいた交流と物々交換のネットワークについての、フィールドワークの結果をお伝えしたい。実際にそれらを経験した人たちの語りは、いまとなっては再び聞くことができないものが多い。それらが教えてくれる内容は、ちょうどマリノフスキーがトロブリアンダ諸島で、文化も言語も違う多数の島々が貝でつくった装身具を贈りあうという平和のネッ

トワークの「クラ」によってつながれていることを見いだしたのと同じころ、奄美・沖縄の島々にも、そうした人間関係に裏打ちされた、物々交換があったことを示すものである。

第 130 回 2012 年 7 月 9 日

チャンネル諸島ジャージー島における

言語復興

ヘンリー・ジョンソン

(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

ジャージー島はその歴史的・文化的背景においてフランス本土と密接に結びついており、たとえこの島が政治的にはブリテンの領土であろうと、その関係はなお緊密なものがある。実際、何世紀にもわたって、島のリンガ・フランカ(共通語)は、島のまわりで何種類も話されているノルマン語のひとつである「ジェリエイ語」Jerriais だった(ジャージー・ノルマン・フレンチ、ジャージー・フレンチあるいは俚言と呼ばれることもある)。ジャージー島の法律言語にはジャージー・フレンチも含まれ、フランス語はある種の政治的文脈においていままなお使用されている。島の住民の多くは英語とフランス語の他にジェリエイ語を話してきたが、こうした3言語使用が一般的だったのは、それが島の内部、島々の間(つまり他のチャンネル諸島の島々)、島の外(フランスやブリテン本国)とのコミュニケーションにおいて必要だったからだ。しかし20世紀に入ってから、ジェリエイ語は急速に衰退している。現在、ジェリエイ語を話す人はわずか数パーセントしかいない。2001年の調査によれば、約2,874人(総人口の3.2%)で、そのうち母語がジェリエイ語である人は113人にすぎない。しかしながら、島の文化を歴史的な側面から見ると、この言語は今日なお島のアイデンティティや伝統との関係で高い重要性を持っている。たとえば、過去20年間を見ても、ジェリエイ語が島の文化に占める重要性は非常に大きなものがあり、そ

の言語的復興は言語学者たちの関心の的であるばかりか、しばしば教育や政治に関する言説の目玉となっている。ジェリエイ語のネイティブスピーカー数が減り続ける一方で、島の文化的伝統やアイデンティティという側面から見れば、その認知は高まりつつある。またそれにともなって、この言語の振興や保存に対する人々の懸念や関心も高まっている。本発表では、このジェリエイ語を言語復興との関連で、内側と外側の両面から論じてみたいと思う。

特別研究会 2012年7月28日  
フィジーにおける沿岸資源共同管理の課題—FLMMA と MPA に主眼を置いて—

鹿熊信一郎  
(沖縄県水産業改良普及センター)

2003年と2005年に、フィジーの6つ漁村と西部離島における沿岸資源共同管理の状況を調査した。フィジーではFLMMAと呼ばれるネットワーク型沿岸資源管理プロジェクトが進展中である。FLMMAの特徴は、明確に示された管理区域があること、そして地域コミュニティが管理に重要な決定権を持ち参加していることである。政府水産局、南太平洋大学、NGOがリード機関となり、それぞれのFLMMAサイトでプロジェクトを推進している。サイトの一つ、ビチレブ島東岸のウドゥンヴァヌア村では、MPAの設定によりサルボウ類カイコソの資源がMPAの外でも増加した。ここでは資源管理の効果をコミュニティがモニタリングしている。バヌアレブ島北岸のササ村では、1990年にチーフの決定により始められた刺網禁止措置により自給漁業の資源は守られたが、現在は漁船数が少なく、もう少し手釣り・スピアー漁の漁獲圧を上げてでも持続していけると考えられ

る。ビチレブ島南東岸のキウバ村では、ナマコ漁業が盛んであり、今後、ナマコ資源の管理が課題となると思われる。バヌアレブ島の漁獲物と沖縄の漁獲物とでは魚種構成が似ており、魚価のグレードも似た傾向をもっていた。資源管理の代替収入源として、淡水魚養殖と中層浮魚礁が有望であると考えられる。現在、フィジーでは沿岸漁場・資源の所有権を政府からコミュニティに戻す動きがあり、今後のFLMMAの方向に大きく影響してくると考えられる。

サンゴ礁生態系はサンゴ礁漁業を支える基盤である。しかし、今後、サンゴ礁生態系・生物多様性の保全とサンゴ礁漁業の振興との間に対立が生じる恐れがある。ここでは、フィジー・沖縄の事例を基に、仮に二つの考え方を「西欧型」・「アジア・太平洋型」と呼び、両者が対立するケースをMPA、サンゴ礁保全、エコツーリズムの課題をとおして考察する。MPAの面積を決める際には、できるだけ大きくしようとする西欧型の考え方と、操業区域を確保しようとするアジア・太平洋型の考え方のバランスをとるため、科学的調査によりスピルオーバー効果を定量的に把握すると同時に、参加型・順応的管理方式によりMPAの面積を決定・改善していくべきだと考えられる。サンゴ礁生態系再生の方向は、基本的には西欧型の考え方に基づく「保全」が第一であり、人為的な攪乱要因をできるだけ取り除かなければならない。しかし、サンゴ礁資源を漁業で利用しながら、人為的なサンゴ礁修復策もとって、サンゴ礁と人類が共存していけるサンゴ礁保全策も探していかなければならない。フィジーにおいては、環境収容力内、かつ、漁撈文化・魚食文化への悪影響を最小限にとどめたアジア・太平洋独自の発想に基づくエコツーリズムの進展が期待される。

---

## お知らせ

---

### (1) 研究調査

国際島嶼教育研究センターでは「島はひとつの世界」という概念のもと、「多島域における環境変動に対する適応」および「小島嶼の自律性」の2つのプロジェクトを軸に、国内外の島嶼部で研究調査をおこなっています。

プロジェクト1：ミクロネシア地域における自然・社会環境と人々の生活に関する調査

目的：ミクロネシア地域ではグローバリゼーションや気候変動の影響を受け、伝統的な社会の崩壊とともに自然・社会環境が悪化している。本地域の島嶼国は環海性・隔絶性・狭小性・分散性という地理的環境としての困難性を抱え、脆弱な経済からの脱却は容易なことではない。しかし、人々は先進諸国の政策に翻弄されながらも、誇りを持って生きてきており、その生活の多様性は尊重されるべきである。本研究の目的は、ミクロネシア地域における自然・社会環境の変化がどのように個人の生活に影響しているのかを明らかにするとともに、この地域の生活改善策の提言を行う。

調査地：ミクロネシア連邦ポンペイ州（ピングラップ環礁）およびチューク州（ウェノ島・トノアス島・トル島・ピス島）

調査期間：平成24年8月5日～9月6日

メンバー・調査内容：

野田伸一（国際島嶼教育研究センター）

Survey of Mosquito Habitats on Pingelap Atoll and Piis Island

長嶋俊介（国際島嶼教育研究センター）

Research on the Improvement Efforts by the Public Sector about Health Care, Public Sanitation and Waste Management

仲谷英夫（理工学研究科）

Geological Environments of the Chuuk (Truk) Islands

川西基博（教育学部）

Ecological Character and Species Diversity of Vegetation on the Chuuk and Pohnpei states

西村 知（法文学部）

Household Survey on Land Use and Rural Economy

小谷知也（水産学部）

Investigation of Fishery Resources in Islands of Federated States of Micronesia and Fundamental Survey to Investigate the Possibilities of Aquaculture and Stock Enhancement for Those Resources

Hafiz Ur Rehman（理工学研究科）

Petrological and Geochemical Investigation of the Volcanic Rocks of the Chuuk Island

河合 溪（国際島嶼教育研究センター）

Shell Colour Polymorphism in Populations of the Intertidal Gastropod *Nerita plicata*

山本宗立（国際島嶼教育研究センター）

Food Survey on Pingelap Atoll and Piis Island



岩石調査 (ウエノ島)



Korea South Pacific Ocean Research Center  
において養殖の現状を視察 (ウエノ島)



ウエノ島からピス島へボートで1時間



蚊の調査 (ピス島)



水産資源調査 (ピス島)



土地利用・植物に関する聞き取り調査 (ピス島)



ピス島における集合写真



殻に模様のあるキバアマガイ (トル島)

(12) 島嶼研だより No. 64

プロジェクト2：水産学部練習船「南星丸」を利用して、硫黄島学術調査

調査地：鹿児島県三島村硫黄島

調査期間：平成24年5月28日～31日

メンバー：

野田伸一（国際島嶼教育研究センター）

田島康弘（地理研究所）

寺田竜太（水産学部）

河合 溪（国際島嶼教育研究センター）

山本宗立（国際島嶼教育研究センター）



調査参加者の集合写真

(2) 着任

外国人客員教授としてニュージーランド・オタゴ大学からヘンリー・ジョンソン (Henry Johnson) 氏が着任しました。招聘期間は平成24年6月20日～平成24年10月30日です。研究テーマは「南西諸島における太鼓の継承に関する研究」で、専門は民族音楽学です。



三島村硫黄島のジャンバースクールにて（中央）

---

## 最近の出版物

---

南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol.33, No1, 2012

Research Papers

RAZON B. C., LIAO L. M. and NAKAGOSHI N.: Success and Failure of Marine Protected Area Management Affecting the Fish Catch of Adjacent Fishermen in Sarangani Bay, Mindanao, Philippines

NARSEY W. L.: Poverty Analysis in Vanuatu: A Critical Review and Alternative Formulation

Materials

HIDAYAT H., KONO Y. and LE X. P.: From Plantation Forestry to the Pulp and Paper Industry: A Case Study of Vietnam

## ～フィールドこぼれ話～

### 「博物館もフィールド」

仲谷英夫（理工学研究科・理学系）

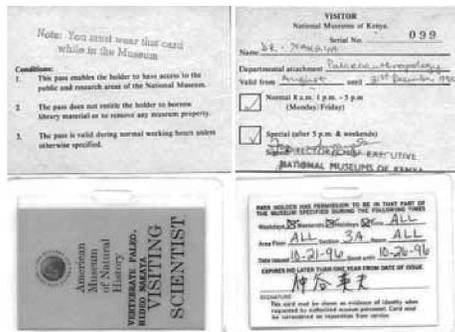
化石は、子供たちには人気のあるものの一つで、実際にアンモナイトなどをフィールドで見つけると、その感激はひとしおです。このようにフィールドで化石を発見することが、化石研究のはじめであり、最も重要な仕事です。

しかし、私が研究する大型脊椎動物では、その後のプロセスが長く、発見してから研究成果が出るまでに、5年、10年は平気でかかってしまいます。その理由の一つは化石を岩石から取り出さなくてはならないこと、また、その化石の位置づけを決めるために、文献だけでなく、実際の化石と比較しなくてはならないことがあります。これらの仕事は主として博物館で行われます。そこで、博物館が第2のフィールドとして重要になってきます。

この写真は、やや古いですが、90年代の博物館入構許可証です。上がケニア（他に顔写真入りの政府調査許可証が必要）、下がアメリカの博物館のもの（長期間の場合は顔写真入り）ですが、右側に許可条件が入っています。どちらも時間制限がなく（5時以降や全時間）、週末や休日にも入構できる条件になっています。どちらの博物館も警備員が24時間、365日詰めて、閉館後も巡回していますので、博物館での仕事が遅くなって終業時間の5時を過ぎても、仕事が続けられ、休みの日でも入館できるようになっていました。アメリカなどでは泊まり込みで仕事をしている研究者も多くいました。9.11後は、ここまで自由に、外部の研究者を信頼して任せてくれるところは少なくなっているかもしれませんが、基本精神は変わっていないと思います。

さて、博物館でのフィールド以上にフィールド的な経験にはいろいろなものがありますが、いくつかの例をあげます。アメリカの博物館では、古い建物の収蔵庫に入ると、人間の体温で室内に空気の対流が起こり、天井の断熱材の石綿が降ってきた（健康問題）、アフリカの博物館では、夜遅くなり、帰ろうとすると警備員が巡回でいなくなっており、なかなか戻らないため、閉まっている高いゲートをのりこえて敷地を出た（30年ほど前の平和な時代でなければ）、北京の研究所から離れた収蔵庫に行くために、市内の交通量の多い地区を自転車ですぐ、片道1時間以上移動した（大きな立体交差点や多数の自転車の中を走る）などかなり危険なものがありました。

最後に、博物館での仕事が、平日の9時から5時までのオフィスワークのように考えている方も多いと思いますが、標本の宝庫である博物館では時間を忘れて研究に没頭できるという点だけでなく、本当のフィールド以上にエキサイティングな経験のできる場所でもあるということをお伝えできれば幸いです。



90年代の博物館入構許可証（上がケニア、下がアメリカの博物館）



## 『とうがらしに旅する』



### 第五回 「媚薬かはたまた毒薬か」

どこへ行ってもみんな猥談が好きだ。唐辛子の調査をしていても然り。「長い棒の先に唐辛子の汁をつけて、女性の股の近くをつんつんすると温かくなって・・・」（ミクロネシア）、「観光客がその辺の唐辛子を取ってきて、島の女性の下着にぬると・・・」（フィリピン）。トルコやインドでは唐辛子に他の香辛料を合わせて媚薬を調合したそう。韓国には男の子が生まれると赤い唐辛子を吊るす風習があり、韓国語で唐辛子を意味する“コチュ”は男児の一物の名称としても使える。スワヒリ語で唐辛子を意味する“ピリピリ”も隠語で男性器を指す。あの刺激、そして視覚的にも、どうも下半身と結びついてしまう。一方で唐辛子は毒としても利用されてきた。「ブヌン・パイワン・ルカイの戦いの時、唐辛子とアセビの果実を潰し、それらを熱しておいた矢の先に付けて放つと、相手が少しの傷でも死んだ」（台湾原住民族ブヌン）。アイヌやアフリカのピグミーも同様に唐辛子を他の植物と混ぜて矢毒としていた。台湾原住民族のツォウは唐辛子をギョトウやハズ、タイワンフジウツギなどと混ぜて魚毒として利用していた。文化や習慣の全く異なる人たちが、唐辛子を同じような概念、つまり「毒」として捉えているのは非常に興味深い。媚薬を使うか、毒を盛るか。今宵、どちらがよろしおま？（山本宗立）

#### 編集後記

科学研究費「ミクロネシアの小島における社会関係資本連携型のデング熱対策実践」の調査でポンペイ州のピングラップ環礁とチューク州のピス島に行ってきました。住民参加による対策を念頭に置いているため、人々と良好な関係を築く、そして信頼を得ることが重要となります。ただし、あまり地域に入りすぎると、今度は客観性を維持したまま調査をおこなうことがむずかしくなる。研究をする上で主観・客観とは一体何なのか、久しぶりに考えさせられる調査でした。（山本宗立）



ピングラップにて集合写真

---

島嶼研だより No. 64 平成 24 年 10 月 25 日発行

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24

電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メール shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>

---